

「みそ」と「くそ」

「ちき」 と 「くち」

「みそもくそも一緒にしてもらつては困る」とはよく言われることである。「そ」の字がついてよく似てはいるが実体は違ふということで「月とスッポン」のたとへの如しである。

えらい違いだということを表現するのになぜ「月と糞」といわないかというところには一見よく似た共通点がないからである。

「月とスッポン」とは丸い形がよく似てはいるけれども実体にはどえらいへだたりがあるということで、たとえにあげられるわけだ。

「みそ」も「くそ」も同様、両者は一見同じ形状をしており、それに「そ」の字まで一緒にゴロあわせがよい。それでよくひきあいに出されるわけだ。

で、この「みそ」も「くそ」もこれを一緒にして「肥つぽ」に入れておく分には別に不都合はない。

「みそ」さえ承知ならそれでよいことであるが、これを「くそ」の方が「みそつぽ」に入れてくれといひ出すとそうはまいらない。

なんとなれば肥つぽの中の両者は、これを一緒にまいてしまえば肥料にはなろう。ところが「みそつぽ」の両者をみそ汁に使うわけにはまいらぬのである。

いかなる人的関係、組織にも「みそ」に該当する人間もいれば「くそ」に該当する人間もいる。そして往々にして、都合の悪いことに、「くそ」に近ければ近い人物ほど自分こそ限りなく「みそ」に近い者だと信じてやまないことが多い。

社会的身分においても知的思考性の気高さにおいても「己れこそがすぐれたる人物だ」と思いこんでおる人が世の中には多いものである。

このことは不幸にしてまたわが業界においても散見されるところである。

「年長者」からもまたあらゆる階層の「依頼者」といわれる人からも先生よばわりされていけば、おのずから知らぬうちに「みそ」が變じて「くそ」になり變わることもむべなるかなである。

何の因果か、同じ職場において、同僚あるいは上役にこれをかかえたる人々は全く同情に余りあるものである。

「さるべきにやありけむ」……これも前世からの因縁というものであろうか。

ひたすらあるいはより広い度量で、一緒に肥つぽに入つてやっているんだと思うよりいたしかたのないことである。

それを一見して世人は「何だ、くそか」と言うではあろう。

「じようだんじやないぜ、みそもくそも一緒にされてたまるか、俺はみそだけど奴はくそだ。」

わかる、わかる、あんたのその気持。しかし柴又の寅さんじゃあないけれども、「それをいっちゃあおしめえよ」……わけのわかつたようなわからないような、例によつてある日、ある時の私の講義である。

「みそ」と「くそ」

「くそとみそとを肥つぽに入れておく分にはかまわないけれども、みそとくそと

をみそつぽに入れておくわけにはまいらない」これを何とか私の語録として残しておきたい。